

大力の伝承について

— 世間話の分析 —

枚浦 勝

一、はじめに

神話の流れを少し汲んで伝説に至る「大力の伝承」は、世間話のなかでも話題にされることは多い。これらのなかで、大力の伝承は「神の行ないや自然の力」を実証的に伝えようとした断片が、世間話にまで零落してしまったものであると考えることも出来るが、また大力を証明するための工夫や行為、そしてその大力を利用して、難儀を切り抜ける巧智談が常に社会生活での困難を克服する期待を伴って人々に伝承されて来たであろうことも容易に想像できる。さらにこれらの伝承が話としての独自性を強め、現実社会の困難さからの逃避という役割を負わされたとき、大話や法螺話の主要な位置を占めることも予想できる。

ここでは、大力の伝承が「神の行ないや自然の力」を伝えようとした断片の、零落したものなのかという点から出発して、世間話に登場する大力の伝承を中心に、「世間話が話を支える人々の社会生

活との密着性や現実での困難克服の期待の現れであろう」との結果を得るに至った分析経過を述べる。

話の原形としての世間話は、「はなす」と「かたり」の対比で、「かたり」のように完全な様式を持たず、内容的にもその場の笑いや珍事、奇談を旨とした「はなし」が世間話であると言われる。また題材的には身の周りの「何か面白いことはないか」という、要求によってその場にふさわしい自由なもの言いだが、「はなし」の源となったと言われる。

『今昔物語』巻二八に見える「亦此ク物云ヒナム可咲カリケルトナム語り伝ヘタルト也」「馴者ノ、物可咲ク云テ人咲クハスルヲ役ト為ル翁ニテナム有ケレバ、此モ面無ク云也ケリ」「物可咲ク云テ人咲クハスル」「極タル教化ノ上手ニテナム有ケル」「昔ハ、女ナレドモ此ク物云ヒ可咲キ者共ナム有ケレバ、世ノ人モ興有テゾ思ケルトナム語り伝ヘタルト也」などのもの言いかしく、即興で語る人はずっと以前から存在した。その中で「かたり」のように完全な様式を持たず、内容的にもその場の笑いや珍事、奇談を旨とした「は

なし」はその場で通用する人名や地名に託つてなされる場合が多く、その方がより事実談としてまた経験談として、真実味（事実性）でなくその場の話し手や聞き手が話に乗れるかという意味での真実性）が帯びるのであろう。そして、その話題のタネは話の原形として、また「かたり」の枕や部分的脚色の主要モチーフ（たとえば「力太郎」などは人生儀礼における主要素として勇氣や実力の獲得を示唆している。）であつたらう。

その意味で笑話と伝説の中で材料的に「たあいのないもの」や「その場かぎりで消えそうなもの」を洗い出し、他地域での同様な話との比較を試みる必要がある。世間話を中心には言えないにしても、伝承の系譜の中で世間話の占める役割は少なくとも現在より増えると考えられる。なお話は伊吹山麓周辺の岐阜県垂井町と坂内村で聞き集めたものを使用した。垂井町が街道の交差する宿場町という成立条件を持ち、坂内村が山村という条件を持っている以外には、話の内容には他地域のものとは違いほとんど見られない。

二、分類の方法

これまでに集めた話をもとにして、いくつかを紹介しながら、分類を考えてみる。話を大力の内容で分けてみると、

一、米俵を持つもの

大力の岡田十兵衛は観音寺へ年貢を納めるのに高下駄を履いて、米四俵持っていた。

垂井町敷原

大力の相撲取りのはんろくは米俵七俵を体につけて土俵を一回回った。

二、石を運ぶ

大滝の力持ちが伊勢参りの途中の村で、皆で動かそうとしていた神社の石を片手で木の上へ上げてしまった。帰りに見たら石はそのままであつた。（鳥居の笠石のことか）

垂井町府中 垂井町市之尾

垂井町大滝

大力の文吉といわれる中川家の爺さんの文吉さんは山へ大きな石を一人で運んだ。

垂井町敷原

怪力の与次兵衛は寺の隅の石を背負つて帰る。その妻も大力で、雨が降ってきた時、与次兵衛の入つたままの風呂桶を背負つた。（夫婦とも大力である。）

坂内村広瀬

大力の龍衛門は大男で高下駄を履き、何十貫もの渋柿をビクに入れ毎日大垣へ売りに行つていた。また三人がかりでも動かさない石を山から一人で運んできた。（渋柿運びが仕事である。）

垂井町府中

三、多くの柴が一度に得られるもの

大力の男が中々柴を刈らないで遊んでいた。男に催促のため馬を持って行くと、大急ぎで刈り、三束宛二十回も運ぶほどあつた。

垂井町市之尾

伊吹弥三郎が石を背負ったが、背中に当たって痛いので柴を間に入れた。石を下ろしてその柴を村人が束ねると七十把あった。

坂内村諸家

四、仕事で柴運びをするもの、他のものも担ぐ

大力の文吉が薪を売りに行くと、橋の架け替えて川を渡れなかった。歩いてならよいといわれ、車と薪を背負って渡った。また鼠の入らない米部屋を作る七十貫の材木を一度に担いで五キロの道を帰ってきた。

垂井町敷原

大力のアサ次郎という梅谷のアサ次郎が柴を車に積んで大垣まで売りに行く途中、橋の工事で通れないので車ごと持ち上げて通った。また病気をしたとき、母親が作ってくれた一升の粥を茶碗一杯だけ残したので、母が食べるように言ったところこの一杯が食べられるのなら寝ていないと答えた。

垂井町梅谷

五、釜やかますを担ぐ

怪力の与兵衛は米一俵を入れた大きな釜を背負う。それを炭焼の人が見て驚いた。紙の原料を煮る釜で炭焼は知らなかった。(この話は紙漉きの伝来を言う。)

坂内村広瀬

大力の種次郎は、上野の住人で普通の人なら牛に付けるほどの荷物を自分で担いで運んでいた。あるとき、馬方が金屑のかますを持たせようとしたら、種次郎は自分の荷物を降ろさずにかますを持ち上げて、馬が潰れるがいいかと聞いた。

『伊吹町の民話』一六四

六、喧嘩の仲裁や材木引きなどに大力を利用する

平尾の力山黒八は大明神山に願をかけ、大力を授かる、垂井の祭りの日の大喧嘩の仲裁で四十人で担ぐ神輿を一人で動かし治めた。また京にのぼり北野天満宮の力自慢で勝ち、北野に不破郡平尾の黒八と名の入った牛を持ち上げている絵馬がある。

垂井町平尾

怪力の与次兵衛は東本願寺建立のための材木が、津汲の大川に沈んだのを、飛び込んで一人で引き上げた。褒美に馬のかいば献上の定めを廃止してもらった。

坂内村広瀬

七、竹の 禪

大力のやぶたの家に、盗人が入った時、やぶたが孟宗竹を抜いて禪を作った。それを見て盗人は怖じ気付いた。

垂井町下町

と幾つかずつの例を示すことができる。

また、これらの話はそれぞれの大力の証明の仕方をいくつかのパターンに分類できる。

米俵を持つ || この話は米俵を幾つか持つ (多くは五俵〜七俵、そのままの姿で土俵を回ったり、一定の場所を歩き回るものが多い。結果として力自慢の様子を示すのみにとどまる。

大石を運ぶ、動かす || これは多数の人が掛かっても持てない石を一人で運ぶが、概して運んだ石の利用には本人はあまり関係がない。

柴を刈る、運ぶ||柴を刈るのが、目的ではなく、何かをした結果、柴が多く運べた。そのために大力の持ち主であると判る。馬牛を持ち上げる||重い荷を運ぶ牛や馬を荷をそのままにして持ち上げる。道や橋が通れないためや、自分の行く手を邪魔された時に発揮することが多い。

釜を持つ||米や荷の入った大きな釜(廻りの人が今までに見たことがない程の釜)を一人で背負って来る。蚕釜や紙漉きの釜であろう。養蚕や紙漉きの起源の伝承の名残かとも思える。

売荷を運ぶ||柴、渋柿などを一人で運んでいく、また牛や馬と共に持ち上げる事が多い。大力の証明というより、後述する道の民の業務を他の人々が大力と見たものであろう。

材木などを運ぶ||この話はある目的のために何かをする、その行為が大力の証明となることが多い。

竹の禪||竹を抜いて禪にするというもので、大力の証明には最も一般的なものといえよう。特に何気なくすると、相手や見ている者が驚く。

と、このようにいくつかに分けられるが、大きくは「持ち上げる」「運ぶ」「抜く」の動作で、重いもの、堅いものなどを簡単に扱うことが大力の証明として使われるのである。

さらに、その大力を証明するに至る動機によって分類してみると、大別して三つになる。

一、ある目的があつて大力を発揮するものは、話として極めて少なく、最初から大力であることが判っている人物でも、ある目的のために特に依頼されて大力を発揮することは少ない。

二、大力を証明するために重い物を持ち上げる話が多い。しかし何のためにその重いものを持ち上げるかは、多くの話の場合明確でない。むしろ誰かに大力を疑われた、もしくは挑まれたために仕方無く大力を発揮して、重いものを持ち上げてしまうことが多い。この場合はただ大力を証明するためにのみ大力を発揮しているのである。しかしながらこの一見無目的な動機には、大力を証明する人間と、その存在を疑い否定する人間との二者の常なる存在が隠されている。すなわち、この話は田の民と山の民、または田の民と道の民など自分達と異なる生活をする集団を、異常の民として認識しようとする人々の閉鎖的な集団意識が、その対立を大力に対する疑義とその証明という立場に凝縮させて描いたものであると言えよう。

三、何かをしたために、偶然大力であることが判明する話は、大力の本人が気づかず、それを偶然目撃した他の人々が大力に驚くという形を取るものが多いことからして、世間話の材料となる見聞の原形かとも考えられる。

動機による分類は、「はなし」が成長変化する過程を示していると思われることができる。すなわち、この分類の三から二への移動は「はなし」の原形である「珍しいもの見聞」が、自分達と生活習慣の異なる人間を、その「はなし」の主人公として、また「はなし」の実存を証明する手段としている認識を示し、「はなし」が単なる見聞から、それを支える集団の意識や認識を含んだものへと成長してきたことを表している。さらに一への変化は、それまで二つの集団の意識対立を含んだものであった「はなし」が、ある行為に

目的を持たせて（大力を積極的に利用して）、集団全体の利益を考えようとすると一つの集団が支持する「はなし」へ変わったことを示していると言える。

さらに異なる観点からの分類として、話の内容が意味するものを考える、

一、紙漉きや養蚕、さらには石工など生業の手段や、生産方法の伝来起源を伺わせるものが、話の中心部ではないが読み取れるもの。

二、前段で述べたように、異なる民を対立する存在として意識していることが話の内容から読み取れるもの。

の二つに分けられる。そして二は、

a、自分たちの仲間でないことの証明 || 固有の名で呼んではいないが、大力を説明するくだりでは自分達とは別の人であるという意識が感じられるもの。

b、職能で関係があることを証明する || 仕事上では自分達の仲間であるが、仕事を離れた生活習慣という面からは異なりが目立つため、そこから大力を証明しようとするもの。

c、マレビト的要因の説明に利用する || 大力の証明の場が旅や商いの途中であったり、田を一人で唐鋤を使って耕作したりなど、本来の定住の民がしそうにないことをする人を主人公にするもの。

d、自分たちの集団の職能を説明する || 自分達の集団としての職能が大力を必要とするものであることを、一人に代表させて語るもの。

に分類出来そうである。この分類の重要な点は、いずれの場合も話

の中に生活習慣の異なる二つの集団の対立が隠されていて、話を支える集団が、また話の主要部分を担う集団（勿論一人として登場することのほうが多いが）が、他からどのように思われているか、何をどのように思っているかが表現される、ことである。

三、世間話の意味するもの

大石を動かす話は、力者や石組の技術を持った人々、さらに鉱山技術者や土木工事の技術を生活の知恵として身につけている人々などの、技術や生活の業の一部を見聞した、かれらと接触した行商や修験の者、さらには運輸などの道の民になった人々の経験談や人伝えのまた聞き話の中心が何であったかを示しているのであろう。このことはまた、大石を動かす話だけでなく、大力の話会体を通じて言えることではないか。厳しい自然条件を生活の基礎に据えている山の民にとって、なにかにつけて自然の力を利用して、より少ない人数での労働を仕事の基本姿勢としなければならないのはある意味で当然である。その中で田の民が考え付かない技術や知恵が受け継がれるのも当然であろう。山姥が人間を入れた重い桶を背負って素早く山へ帰っていく姿は、山の女の生活の一場面であったかもしれない。

目的もはっきりしないまま米俵を持ち上げたり、橋や道路の工事場で牛や荷物を持ち上げるなどは、山へ重い荷物をポツカする「強力」を見て、その仕事を理解できない田や町の人々が、興味本意に少し創造的なものを加味したものであると考えるのは無理でない。

たとえば、本来はその仕事に必要な条件として、「町方では米屋の雇人に石や米俵を持たせて給金を決めた。」ことが、次第に芸能としての発展をみて、ついには「曲持ち」などと称して「笛太鼓のおはやしつき」で「江戸の花五人持ち、布袋の川越し、俵の差し分け、酒樽の差し分け、力石の差し切りなど」を造りだしてきたこと（東京都江東区深川福住町の力持ち曲芸の保存）など、いつでも変化する要因が存在していたのである。

道の民は本来的に存在したかどうかは判らないが、かなり古くから職能として存在したであろう。中世の史料にあっても宿の力者や強力、馬力、さらには坂の者や河原者など、あるいは力で、さらには特別の技術や一芸で渡り歩いた人々を道の民とみることも出来る。また一方では、山の民と田の民、あるいは田の民と海の民などの経済的交流の必要は生活必需品を補充しあうという関係において、また経済的優位地域での製品買入れや労働力の移動が原因で、物・人・情報を運ぶ仕事や双方を結ぶことを専業とする人々があって当然であろう。かくて山の民や海の民の部分的な人々が、なんらかの事情で排除もしくは疎外された元田の民を含んで、道の民へと分化していったのではあるまいか。

これらの人の伝承に世間話の要素が多い（既に我々の伊吹山麓の調査でも、田園を主とする伊吹町よりも街道の分岐点に発達した垂井町のほうが大力を材料とする世間話が多い）のは「以前は引込んだ田舎の村々に、世間話を運んで来る人の種類が限られて居た。たまたま独りで長旅をして、戻つて来た者があつても、さういふのは話が下手であつたり、又は作り事をするのが容易に露はれた。話に

は別に劫を経た名人があつて、それは行商とか遊歴文人とか行脚僧とかの、先々世話になり宿主の機嫌を取り結ぶべき者、又は旅芸人などの殆ど軽口を専業にして居る者であつた。どんな話が村の人たちには喜ばれ、もしくは目を丸くされるかを知り抜いて居る上に、誠にやかに地名や人名を取つて付ける術はよく解して居た。」（世間話の研究）『定本柳田国男集七』との言に依るまでもなく、道の民としての生活の知恵が働いていたのである。

四、世間話の分析

世間話は通常、地名や人名を織り込みながら話されることが多いとされるが、中でも狐狸に化かされた話や動物が化けた話など動物と人間との関係が示されることが多い。しかし、よく考えてみると化かしたり、化かされたり、化けたりの作用は、対人関係の場でも多く経験することで、まして相手の人が自分達と異なる風体容貌、生活習慣を持つている場合はなおのこと緊張して、正常な対人関係が成立しない場合が多いであろう。このような経験を持つたとき、人は被害を受けたと考えたり、他の人に事実を少し興味のある方へ曲げて伝えるなど自己防衛や自己弁解の心理が働くことは否めない。とすれば「化け話」の多くは動物の仕業もあるだろうが、自分達と異なる人間を見聞した時の人の反応が元になって、話として構成され、同時に何度も見聞や被害の主人公の名を替え、場所を変えて、様々にしかも一定のパターンを繰り返して続いてきたのであろう。昔話や伝説がその伝承を支える集団に係わる内容を主とするのに対

坪井洋文著『稻を選んだ日本人』未来社

(すぎうら・まさる／摂南大学)

して、世間話はその伝承を支え、伝える集団の伝承ではなく、その集団の他の集団に対する認識を題材としていると言える。そしてその話の内容はとりもなおさず語り手の「異なる人間」観、すなわち「他の民認識」とも言うべきものを示しているのである。

世間話全体にわたるには、かなり検討を要する問題であるが、少なくとも大力に関して、また狐や狸の化け話については、以上に述べたような分類および分析が有効ではないかと考えている。

(付記)

本稿は昭和六十一年六月七日の遠野市における日本口承文芸学会で発表したものを元とした。当日会場で御教示頂いた小澤会長はじめ多くの会員の方々に感謝致します。

【参考文献】

『日本昔話事典』経験談、世間話、大力の項目

柳田国男著「世間話の研究」(定本柳田国男集第七巻、筑摩書房)

房)

柳田国男著「口承文芸史考」(定本柳田国男集第六巻、筑摩書房)

房)

大島建彦著『話の伝承』岩崎美術社

関敬吾著『日本の昔話―比較研究序説―』NHK

『山民と海人―非平地民の生活と伝承―』(日本民俗文化大系

五巻) 小学館

井上鋭夫著『山の民・川の民』平凡社選書